

忙中の読書

—「ソーシャルロールバリゼーション入門」を読む—

津守 真

この文章が印刷されるころには、O M E P 世界大会は終わっているだろうが、これを書いているいまはその準備の忙しさのさなかにある。そんなときにも、絶えず送られてくる新しい書物を手にとると違う世界が開かれて、事務に固く滞ってしまいそうな心が柔らかくされる。

その中の一冊に、富安芳和氏が訳された、W・ウオルフェンスバーガー著『ソーシャルロールバリゼーション入門——ノーマリゼーションの心髄』（学苑社 一九九五）がある。一見難解なのだが、つい引き込まれて読まされてしまった。

著者は、見る者と見られる者との、ほとんど超えがたい立場の違いを問題にする。

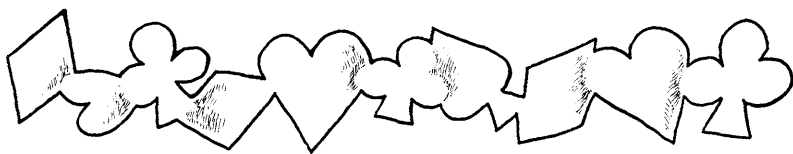
何かを「する」側にとっては、自分の立場はあまりにも自明なので、「される」側の疑問や感情に気がつかない。先生と生徒、指導する者と指導される者、声をかける者と、声をかけられる者というように、それは生活の至るところにある。障害者とのかわりにおいてこのことは顕著であり、根本的である。

普通にことばを話したり歩いたりする人は、それだけで獲得している特権に気がつきもしない。ことばを話すことができず、歩くことができない人が、社会生活の隅々まで低く見られている残念さを考えもしない。そのうちに、それすらも無感覚になって、人間関係が固定してしまう。

この書物の著者、ウォルフエンズバーガーは、ノーマリゼーションという語を最初に用いた人で、一九七二年に「ヒューマンサービスにおけるノーマリゼーションの原理」という書物を書いている。しかし、ノーマリゼーションという語がいくつもの疑問や誤解を生んだので、それに代えて「ソーシャルバロリゼーション」という語をこの書物で提唱している。

この書物の第一章で、彼は、人間の知覚を問題にする。





知覚は本来評価的なものであって、「価値を伴わない知覚」はありえない。他人から否定的に知覚され、評価されるとき、彼はそれを「価値の引き下げ」と呼ぶ。「それは、知覚されている人に、本来備わっているもの」ではない。この書物は、この考えを終わりでまで貫き、いろいろの角度から検討する。それも、障害をもつ人々の生活の質を向上させるための社会的実践を基盤としてである。

人間の社会には、どこにでも、「価値を引き下げられている」一群の人々がいる。その理由は、「最も本質的には、人間は不完全だからだ」「すなわち、人間は、非常に小さな有限の被造物であり、神ではなく、また決して神にはなれない存在だからである。」と著者は言う。

人は、「富と物の所有」「健康と肉体の美」「若さと新しさ」「適応、自立、知能」「生産性と物質的な貢献」に高い価値をおき、その逆のもの価値を引き下げる。そして、その人々を社会の中で低い地位に追いやり、軽蔑する。また、その人々を哀れみの対象として見る。慈善の対象として見るときには、人は、その人の世話をしなければならぬという義務を感じるが、喜びも、肯定的感情もたない。自然の人間関係は「有給で雇われた人」との「人工的に買われた」関係に置き換えられる。

「価値を引き下げられた人」の側から言えば、「個別性を剝奪され、画一的な団体処遇を受ける」「欲しているときに欲しているものを、しかも欲している仕方得ることはでき

ない」「サービスの名の下にいたくはないところに入れられてしまう」。

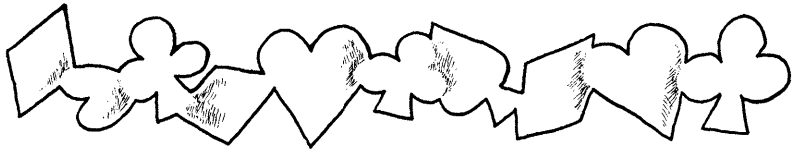
このことが、この著者の言うヒューマンサービス訓練プログラムの基本である。

こうして、「可能なかぎり文化的に価値のある手段により、人々、ことに価値の危険に瀕している者たちのために、価値のある社会的な役割の可能性、確立、増進、維持、ないし防衛」をすることが、ソーシャルバリゼーション (valorizing) 価値を高めることである。

具体的には、「価値のあるコミュニティ内の普通の住宅で、価値のある人々とともに暮らし、価値を引き下げられない仲間と一緒に学び、普通の人々と同じところで働き、そして、作業所や、レクリエーションや買い物や、社会のメンバーが行っているその他すべての活動に、肯定的な仕方に参加すること」である。価値を引き下げられた人々は、ときには、普通に必要とされる以上に、スーツを着てネクタイをしめるとか、子どもならば、可愛らしい洋服を着ることが、他人の人から価値を認められるのに重要になることもある。

「ノーマリゼーション」という語を使うと、「それを聞いたとき、ほとんどの人々が即座に、自分たちがそれが意味することを知っていると思ってしまう」。それで、自分たち





で勝手に、常識的に、「普通」ということを解釈した。

実際、ノーマリゼーションの名の下に普通の規準に近づけるために、本人の側からは意味のない訓練や教育を正当化した。

障害をもつ人が、自分にとって意味のあることを与えられていないために、「乱れた行動」をしたり「絶え間ない動き」をすることも多い。ある強度の攻撃的で破壊的な行動を示していた知的障害の男性が、長年の間の行動介入プログラムや薬の投与が効果がなかったのに、グループホームに移されて間もなく、「新しい人間」が誕生した例を著者はあげている。彼の以前の不適応行動はほとんど完全に消失し、協力的で自己志向的になったという。こういう例は、大人でも子どもでも、数え切れないくらいあげることができるはずである。人間には意味のある生活文脈が必要なのである。

この書物は、読みやすくない。むしろ難解である。しかし、よく読むと、実際にはごく当たり前のことを述べているにすぎない。そして、それこそが実際には実現することが難しいのである。現代はこの考えを基本にするヒューマンサービスの専門家を必要としている。

(愛育養護学校)